九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大谷秀樹『貝島家の炭坑経営ー明治・大正期　会計帳簿の分析ー』 ： 著書と著者について

山田, 秀
九州産業大学

https://doi.org/10.15017/13892

出版情報：エネルギー史研究 ： 石炭を中心として. 24, pp.99-105, 2009-03-19. 九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：

【書評】

大谷秀樹『貝島家の炭坑経営―明治・大正期　会計帳簿の分析―』―著書と著者について

山田　秀

本書は、昨年十月に私家版として刊行され、著者と親しい研究者を中心に配布されたものである。著者はこの刊行を終えた二月後に亡くなられた。この書は著者の遺著となってしまった。

筆者は、この著書の書評を依頼されたものの、石炭鉱業史を専門にしていない者が的確な評を述べることもできないのでためらっていたが、生前学窓を同じくし、一時仕事の机も並べた者として、著書と著者の紹介ならできると思い、この著書を広く知ってもらうためにも書かせていただくことにした。

著書について

本書はA4版の大きな版である。学術書としては珍しい形である。著者は「はしがき」で、大きな表を載せるにあたってはこの版にするしかなかったと述べているが、実際本を繙くと各章末に、貸借対照表などの頁をまたぐ大きな表がいくつも掲載されている。A4版にされたことが頷ける。

さて、本書は四つの章からなる。各章はそれぞれ既に論文として発表されている。発表順に並べると次の通りである。

1　「創立期貝島鉱業合名会社の資金調達と石炭販売」（『福岡県地域史研究』第十八号　西日本文化協会　二〇〇〇年三月）《本書第二章》

2　「貝島鉱業合名会社『総勘定帳』に見る財務構造の変化」（『エネルギー史研究』第十八号　九州大学石炭研究資料センター　二〇〇三年三月）《本書第三章》

3　「第一次大戦前後における貝島一族会の事業展開」（『エネルギー史研究』第二十号　九州大学石炭研究資料センター　二〇〇五年三月）《本書第四章》

4　「創業期貝島炭坑経営の特色―企業内部請負制と補完炭坑について―」（『エネルギー史研究』第二十一号　九州大学記録資料館　二〇〇六年三月）《本書第一章》

第二章から書き始め、第三章、第四章と進めて、最後に第一章を書き、

貝島炭礦の創業期から、三井の一手販売権を取り戻して自家販売に至る大正期までを完成させている。そして全体の論旨を統一し、問題意識を明確にして本書をまとめている。

著者の問題意識とは、「はしがき」で述べているように、貝島炭礦は、筑豊石炭鉱業において地場資本として三井・三菱などの財閥系の炭坑と肩を並べるまでに成長したにもかかわらず、なぜ長期間にわたって三井財閥に支配されねばならなかったのか、それは裏返せば、「地場資本の成長と限界が何に由来するものなのか」という点にあった。

著者は、このような問題意識のもとで、貝島炭礦の会計帳簿などの一次史料や「七十年史稿」資料などを駆使して経営分析を行っている。

全体を時間的流れに沿って、明治前中期の創業期から大正期の貝島商業株式会社・貝島合名会社の設立までを、創業時代、貝島鉱業合名会社時代、貝島鉱業株式会社時代のそれぞれの経営組織、業務形態、資金調達、財務構造について詳細に述べている。本書のサブタイトルは、「経営帳簿の分析」なっているが、単に帳簿の財務分析ではなく、貝島炭礦の本格的な経営史研究である。

さて、「第一章　創業期貝島事業経営の特質」では、いくつかの炭坑を渡り歩いて請負掘りを長く続けていた貝島太助が、香月炭坑の請負で獲得した資金をもとに明治十八年に大ノ浦炭坑および菅牟田炭坑の鉱区を獲得して、本格的に炭坑経営に乗り出した創業期の貝島の業務組織のあり方、そしてそれが経営体としての貝島のその後の姿を規定していったことが述べられている。

すなわち、香月炭坑時代の貝島一族（姻戚までを含めた）による請負業務のあり方は、大ノ浦・菅牟田炭坑においても踏襲され、創業期の貝島の経営組織は、主要な業務が一族によって請負でなされるという、本部による直轄制とも事業部ごとの独立採算制とも異なる、「企業内部請負制」とでも呼ぶべきものであり、それは、炭坑業の発展過程に出現した特異な企業形態であると指摘している。また、採掘・運搬は坑業受負人の裁量であったが、川船輸送と販売は坑主の管理であったものの、当時においては輸送手段を保持し、販売組織を自力で行うことは困難だったため委託せざるを得ず、それが三井物産に販売権を委ねることへ繋がることとなったとしている。

明治二十四年の選定鉱区制の実施によって鉱区の拡大を図らざるを得ず、貝島は多額の負債を抱えることになり、その結果井上馨を通じて毛利家、三井物産から資金の肩代わりをしてもらい、大ノ浦・菅牟田両坑の借区名義が三井物産の手に渡るとともに、両坑の採掘炭を三井物産が一手販売する契約が結ばれることになったと述べている。

大ノ浦・菅牟田両坑の鉱業権・販売権を握られる一方、貝島は明治二十六年に瑞穂炭鉱の経営に乗り出し、日清戦争の炭況の活発化によって大きな利益を上げることになる。二十九年に三菱に譲渡するまでに五万円に上る利益をあげ、それによって負債を返済し、鉱業権を取り戻したことを指摘し、この瑞穂炭鉱を貝島にとっての「補完炭鉱」としている。

「第二章　貝島鉱業合名会社の経営構造」では、明治二十九年毛利家および三井物産からの借財を整理して鉱業権を取り戻し、貝島鉱業合名会社を設立して以降、明治四十二年に株式会社化するまでの時代を取り扱っている。日清戦争にともなう好況下で毛利家に渡っていた鉱業権を

取り戻すとともに、長期融資・固定した短期融資先が毛利家・三井物産から三井銀行・百十銀行へシフトする一方、合名会社設立にあたって会社組織を大きく変えている。それまで姻戚を含めた一族会社であったが、経営者から姻戚をはずして貝島太助と兄弟、およびその家族に限定することになる。その経緯を「定款」や「家憲草按」を用いて詳細に述べている。また、その背景には井上馨が大きく関わっていたことを指摘している。そして、経営陣へ中根寿や金子辰三郎の入社、また永江純一の顧問就任など三井に近い人物が入ってきた過程が述べられている。

次に、明治三〇年代前半までは貝島炭の販売において毛利家と百十銀行からの借入資金で採掘していた炭坑では自由売りが行われ、三井銀行からの借入金が入っていた炭坑では三井物産への委託販売が行われていたが、次第に借入先が三井銀行に集中していくとともに物産による委託販売が行われるようになったことを明らかにしている。そして、三井物産による委託販売が前貸し的な性格を持っており、そのため三井へ依存せざるをえなかったとしている。

さらに、貝島姓以外の親族などが採掘にあたっていた傘下の関連炭坑―創業期には補完炭坑であった―について言及し、それらの諸炭坑が三井物産・三井銀行の資金融資にともなって、次第に本社直轄となっていくとともに三井物産による一手販売が進んでいくことを、各坑業所の採掘費と販売権の相関をもとに解明している。

次に「第三章　貝島鉱業合名会社の財務構造」では、明治三〇年代の財務構造の変化を、「総勘定元帳」から作成した財務諸表で数量的に分析している。まず、財務の安定性、流動性、収益性を概観し、資金調達問題を資本・負債の変化から見るとともに、資金運用の実態をとりあげている。さらに、日露戦後には借入金の減少―三井への完済―とともに積立金の増加がみられ、資金的に余裕がでてきており、それらが社員へ分配されるとともに、株式会社への転換に繋がっていく様子を描いている。

最後の「第四章　貝島一族会の事業展開」であるが、ここでは明治四十二年の貝島鉱業株式会社の設立から貝島商業株式会社（大正八年）を設立して自家販売を開始するまで（大正九年）の貝島一族会の事業展開を考察している。

明治四十一年に「貝島家家憲」が制定されて貝島一族が規定され、翌四十二年に「貝島一族会」は貝島鉱業合名会社を改組して株式会社とするが、この「貝島一族会」がさまざまな事業を展開することになり、鉱区所有においても「一族会」によって鉱業株式会社の所有であったり、「一族会」が所有したりと、「一族会」が貝島の企業体の核であったことを、「総勘定元帳」の「一族会預り金勘定」の分析によって明らかにしている。また、鉱工業投資や農地取得なども「一族会」によって行われていたことを指摘している。

そして、大正八年に貝島商業株式会社と貝島合名会社が設立されるが、その間の経緯を詳しく述べている。明治四十四年に三井物産は、一手販売制度で取り扱ってきた麻生炭・三井鉱山炭とともに混炭して販売するプール計算制度を導入した。それは貝島にとってははなはだ不利なものであったため、大正四年に貝島に大きな影響力を持っていた井上馨が、翌五年に貝島一族の中心であった貝島太助があいついで亡くなると、貝島鉱業株式会社の経営は大きく転換した。当時第一次世界大戦の影響により大正六年から炭価が大きく上昇し、そのため貝島は次第に自家販売

を行うようになり、大正八年に貝島商業株式会社を設立し、三井との関係を絶ってすべて自家販売するようになった。同時に「一族会」は、持株会社として貝島合名会社を設立した。ここまでを本書では取り扱っている。

以上、ごく簡単に本書の要約をした。紙数の都合もあり著者の意を十分に汲んでいない所やあるいは筆者の読み間違いがあるかも知れない。

貝島炭礦については、これまで多くの研究がなされてきた―研究史については畠中茂朗「貝島炭礦研究史序論」（九州国際大学社会文化研究所『紀要』第五〇号　二〇〇二年）に詳しい―。　中央資本と地場資本の関係、地方財閥の問題、石炭鉱業の経営史的考察、労働問題など、多くの観点から論じられてきたが、何といっても特筆すべきは、本書は第一次史料を丹念に駆使し、事実関係を十分に押さえて貝島鉱業の創業から確立までを詳細に叙述していることであろう。密度の濃い実証研究である。

しかし、本書は、貝島商業株式会社と貝島合名会社の設立時点で終わっている。第四章の〝はじめに〟で、「商業株式会社の『総勘定元帳』をもはや見ることができないので打ち切らざるをえなかった」と述べており、また、〝むすび〟においても「自家販売の進展状況や、その前提をなす市場構造の変化への考察が必要であることは言うまでもない。これらをさらに検証しなければならないが、筆者としてはここで打ち切らざるを得なかった」と記しており、もはや研究を進めることのできない著者の無念さが伝わってくる。

また、本書は多くの一次史料を全文掲載しており、史料的価値の高いものとなっている。さらに総勘定元帳やその他の会計帳簿を整理して、貸借対照表をはじめ、さまざまな表を数多く作成して載せている。さらに、末尾には貝島事業年表を「創業時代」、「貝島鉱業合名会社時代」、「貝島鉱業株式会社時代」に分けて掲載している。それらをさらに、生産・輸送・販売などに分類している。これらは、今後の研究者にとって大変ありがたいものとなっている。著者としてはこれが利用され、更なるの研究の深化を願ってのことであろう。大きな宿題が残されたようである。

そして。本書の通底に流れるのは、なぜ貝島炭礦は潰れなければならなかったのか、子供時代の活気のあった町が、次第に衰退していく様を目の当たりにしてきた著者にとって、言いしれぬ不条理を感じ、日本の石炭産業とは何だったのか、それを明らかにしたいという思いではなかったろうか。

著者について

著者である大谷秀樹君は、一昨年十月に本書を刊行した直後、同月十七日に九州産業大学で開かれた経営史学会西日本部会に本書を携えて来、出席者に自ら配って回った。それが、筆者が著者に会った最後であった。その後、「福博企業者史研究会」で報告をするということで、『宮田町誌』についての電話があり、しばらく宮田町の古野文書のことなどについて話をした。その際、もうこの報告が最後である、と語っていたが、声の調子もとくに変わったこともなく、変なことを言うなと思ったものの、深く問い質さなかった。あとで思うと、彼は別れを告げようとしたのであったろう。こちらから何も聞かなかったのが、いまも心残りである。ただ、余命幾ばくもないということを聞いても、私はうろたえるば

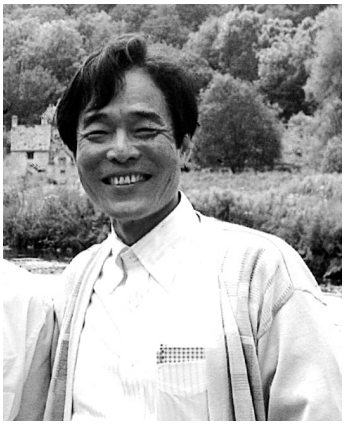
かりであったろう。何も言わなかったのは彼の思いやりであったかも知れない。

それから、およそ一月あまりのちの十二月二十五日、クリスマスの日にご家族に見守られて逝かれたということを後にお聞きした。

私が訃報を聞いたのは一月に入ってであった。彼が肝臓癌であり、最後には骨にまで転移していたということもあとで知った。彼がこのような病を得ていたことは、ご家族以外ほとんど誰も知らされてなかった。

筆者が彼と出会ったのは、福岡大学の大学院であった。彼が昭和五十一年に博士課程前期に入学してきたとき、私は博士課程後期にいた。それからの付き合いである。彼は入学したとき既に筑豊石炭業―貝島炭礦を研究するという明確な目的を持っていた。彼は宮田町（現宮若市）の出身であり、祖父の代から貝島炭礦で働いていると言っていた。日本資本主義のもとで翻弄され、衰退していった石炭産業、そして炭鉱とは何だったのか。さまざまな思いを抱えていたようである。

昭和三十年代より、政府のエネルギー政策の転換によって次第に石炭産業は衰退していき、昭和三十五年には三井三池炭鉱において総資本対総労働の全面対決が起こった。これ以前から合理化と人員整理が行われており、炭鉱はしだいに淋しくなっていったようである。彼が小学校のとき、同級生が一人また一人と転校していくことの悲しさ、辛さを作文に書いていたのを、たまたま読んだと、実兄秀俊氏は語っておられた。貝島炭礦で生まれ育ち、急激に変わっていく様を見つめてきたことが、石炭産業史研究―貝島炭礦の研究へと駆り立てていったのであろうか。


2004年８月 イギリス旅行での著者

彼が大学院に入学した年の八月、貝島炭礦は閉山した。筑豊のヤマは貝島を残して閉山しており、貝島も露天掘りだけを稼働していた。それも続かなくなっていた。閉山後であったと思うが、その年の秋の雨上がりの午後、恩師である藤本隆士先生そして大学院の院生とともに彼に連れられ、菅牟田炭鉱の竪坑の跡や露天掘り（まだ底をトラックが走っていた）、人影まばらな炭鉱住宅などを見て回った。淋しい光景であった。

修士論文の作成に取りかかった彼は、ちょうどその頃『宮田町誌』上巻の編纂が行われていた宮田町誌編纂室に足繁く通っていた。当時、町誌編纂室には現在山口県立文書館副館長の吉住久年氏がおられ、同氏からいろいろ史料情報などを得ていたようであった。また、閉山後の貝島炭礦清算会社にも頻繁に出入りし、史料の所在の明確化や確保に努めていたようである。

『宮田町誌』上巻は昭和五十三年に刊行されるが、彼はその前年の博士課程前期在学中から下巻の編纂嘱託として勤め始めた。翌年であったと思うが、彼から私に下巻の産業編を一緒にしないかとの声がかかり、引き受けることにした。

編纂室は、開館したばかりの「宮田町石炭記念館」にあった。石炭記念館は廃校になった大ノ浦小学校を利用したもので、編纂室はその隅の教室にあった。今は二階建ての集合住宅となっているが、石炭記念館の

東側には木造の校舎が壊されないまま建っていた。夜に暗い校舎の窓をみると、その先には深い真っ暗な闇の世界広がっているような気がした。

私は、月に何度か泊まりがけで編纂室に通った。彼は黙々と史料の採録をしていた。ウィスキーの空き箱にA5の採録カードがだんだん蓄積されていった。また、史料の採訪に動き回っていた。とくに、貝島炭礦の清算会社には何度も足を運び、同社の持っていた「七十年史稿」の資料や会計帳簿などの史料をみつけ、石炭記念館に移管するのに尽力した。その後、それらの史料が多くの研究者によって利用されていることを考えてもこの功績ははなはだ大きいものである。とにかくこの時期、彼は精力的に史料収集と目録作成に励んでいた。

そんな中でも、彼の音頭で、編纂室のみんなで—といっても編纂室室長でもと小学校校長の大曲秀吉先生と、史学科を卒業したばかりの清水範行君（現宮若市役所）とわれわれの四人だけであったが、春には千石公園で花見をしたり、秋にはおでんを作って暗い校庭で月見をしたり、あるいは玄海灘に面した岡垣町の波津港までタクシーを飛ばして忘年会をしたりした。

石炭記念館のはずれにかつての用務員室兼宿直室があり、彼はそこに住んでいた。私もそこに泊めさせてもらっていた。夕食後には彼の部屋からはバッハの荘厳な曲が流れていた。朝にはみそ汁を作って私に食べさせてくれた。そこにどのくらいいたかはっきりとは思い出せないが、石炭記念館館長の井上芳邦さんが住まわれることになって、彼は旧菅牟田坑の職員寮に移った。寮は十室以上あったろうか、木造モルタルの二階建てであり、赤茶けた斜面にポツンと建っていた。当時はもはや職員はおらず、貝島炭礦関連会社の社長さんたちの賄付きの宿舎となっていた。私もそこに泊めてもらい、その社長さんたちと時に飲む機会があった。彼は、社長さんたちから可愛がってもらっていたようだった。

昭和五十五年八月に私は県史編纂室に嘱託として入ることになったため、次第に町誌編纂室へ行く機会が少なくなった。彼も五十八年より海星女子学院高等学校に勤めるようになった。そのため、次第に会う機会が少なくなってしまった。しかし、彼が勤務のため福岡に越して来たので、行き来は絶えなかった。私に娘が産まれたときには、お祝いといってガラガラを持って来てくれたりした。

しかしこの間、彼は高校教師という多忙の中で原稿執筆を続け、九五〇頁に及ぶ『宮田町誌』の炭坑編を書き上げ、それは平成二年に刊行された。明治の草創期から戦前まで、貝島炭礦を中心に宮田町の炭坑の発展過程を地域社会との関わりの中でまとめたものであった。この本は、筑豊石炭産業史を研究する上で欠かすことが出来ない一冊となった。

その後は、もっぱら高校の仕事で忙しいようであった。私が転居したこともあり、時折研究会で会うぐらいとなり、ゆっくり話をした覚えがない。平成十一年であったと思うが、もう一度貝島について論文としてまとめるということを本人から聞き、ゲラを見せていただいた。それが本書の第二章に相当するものであった。その後、第三章部分は平成十四年三月刊行の『エネルギー史研究』十八号に掲載された。そして、平成十七年三月刊行の『エネルギー史研究』二十号に第四章部分を載せているが、実兄からお聞きしたところ、その三月朔日に彼は肝臓癌の破裂により倒れたとのことであった。いつ頃聞いたのかはっきりしないが、自分はB型肝炎である、と語っていたことがあった。いつの間にか肝硬変

となり癌にまで進行していたとのことである。

翌年、彼と電話で話したことがあったが、その電話で今年の三月に高校を辞めたと話していた。理由を聞いたが、学校の都合でというようなことを言って、病気のことは一言も触れなかった。しかし、この間にも執筆を続け、平成十八年三月刊行の『エネルギー史研究』二十一号に第一章部分を掲載している。

本書のはしがきの日付は二〇〇七（平成十九）年一月となっている。後書きは同年九月である。病床にあって刊行を決めたのであろう。そのため、一月に四篇の論文をまとめはじめて九月に脱稿している。印刷所の担当者にお聞きしたが、やはり入退院を繰り返しての執筆であったとのことである。最後に会った経営史学会西日本部会の終了後、懇親会へ出席しないかと声をかけたが、いつものように微笑んで断って帰って行った。

その後、十一月下旬にふたたび入院し、本人が希望していたキリスト教系のホスピスに転院して、そこで亡くなったとのことである。五十七歳であった。

大谷秀俊氏（著者の実兄）のお話しでは、本書の余部がまだあるとのことです。ご希望の方にはお送りされるそうです。下記宛先に郵便かメールでお申し込み下さい。

宛先

大谷秀俊
〒811-3211
福岡県福津市有弥の里一丁目一三-三
eメール　rkbmy794@ybb.ne.jp